

Yamada Takuji

山田卓司

情景作家

江戸時代の風景が

今、蘇る

旅の要所であった「東海道五十三次」の風景を、鉢植えのなかで作ってしまおうという江戸時代の発想が、令和の今、「情景王」の手で現実に。東海道五十三次の中に入り込み、時空を超えて旅するような感覚に陥る三体のジオラマたち。さあ、江戸時代へタイムスリップしよう。



●主な受賞歴 '80年「第8回タミヤ人形改造コンテスト」金賞、'88年「第16回タミヤ人形改造コンテスト」金賞、'94年テレビ東京「TVチャンピオン」第1回全国プロモデラー王選手権 優勝、'95年テレビ東京「TVチャンピオン」第2回全国プロモデラー王選手権 優勝、「ユーロ・ミリテール」(英国)情景部門 金賞、'98年テレビ東京「TVチャンピオン」第5回全国プロモデラー王選手権 優勝、'99年テレビ東京「TVチャンピオン」第6回全国プロモデラー王選手権 優勝

●代表的な作品集 情景王—山田卓司作品集 (ホビージャパン刊)、情景王 The diorama King! (エクシング刊 Windows, Mac Hybrid CD-ROM)、LABOR in Action TAKUJI YAMADA DIORAMA WORLD (バンダイ刊)

1959年(昭和34年)静岡県浜松市に生まれる。幼い頃より模型工作を趣味とし、中学時代には地元のデパートで行われた模型コンテストで毎年入賞。高校時代には模型同好会を発足、社会人の模型サークル「ダス・ライヒの会」設立にも参加する。78年に上京、日本工学院専門学校に入学。在学中に模型雑誌『月刊ホビージャパン』に執筆を始める。卒業後は工業模型製作会社にて、原子力プラントや工業模型の製作に従事。87年、浜松市に戻りフリーのプロモデラーとして活動開始。模型雑誌で作品を発表する傍ら、商品原型、イベント用情景を製作。静岡、浜松、鳥取、沖縄などでジオラマ作品展を開催、模型教室の講師、テレビ出演など多数。





山田卓司「鉢山図会 日本橋」(2020年) ジオラマ作品 35.5cm×36.5cm×29cm

とうかいどう ごじゅうさんつぎ はちやまず え
『東海道五十三駅 鉢山図会』(日本橋)

木村唐船作・歌川芳重画 嘉永元年(1848)刊
半紙本 2冊

素材となった歌川広重画、保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』の「日本橋」には、遠方に火の見櫓、手前に日本橋がある。橋上に大名行列先頭の先箱とおおとりけ、大鳥毛の長槍を高く立てた足軽、その後ろに打裂羽織の徒士衆、画面左側に魚河岸から魚を仕入れた棒手振りが描かれている。一方『鉢山図会』には、浮世絵には存在しない富士山と江戸城を加えて、道中双六振り出し図に相応しい伝統的図柄になっている。(山下則子)



作品紹介
古典籍解説

蘇る「東海道五十三次」

とうかいどう ごじゅうさんつぎ はちやまず え
『東海道五十三駅 鉢山図会』

木村唐船作・歌川芳重画
嘉永元年(1848)刊
半紙本 2冊

歌川広重画の最も有名な保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』を基に作成した鉢山を絵画化し、多色摺絵本にしたもの。鉢山とは、盆に石や土を盛り、植物なども使って立体化した盆栽に類似した作り物をいう。一方、それより早くから存在した中国風の同種のもは、「古景盤」と称され、中国風と日本風は厳密に区別される。現在世界的なブームとなっている、東洋の園芸文化である自然の縮景(盆栽)の一変型といえる。(山下則子)

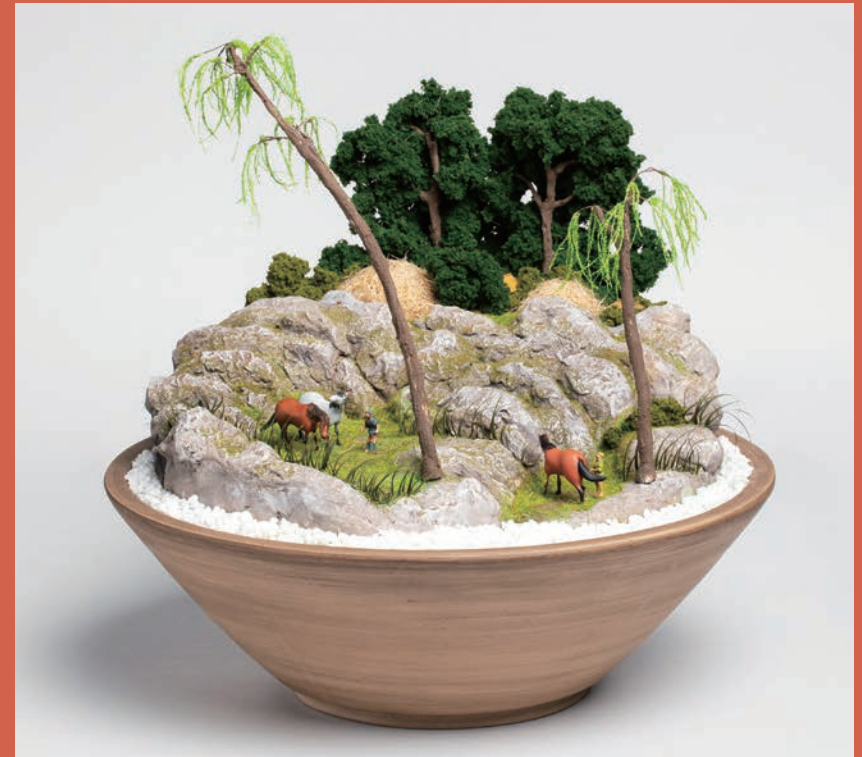


山田 8



山田卓司「鉢山図会 京三条」(2020年) ジオラマ作品 33cm×29cm×30cm

山田 7



山田卓司「鉢山図会 池鯉鮒」(2020年) ジオラマ作品 36.5cm×35cm×37cm

とうかいどう ごじゅうさんつき はちやまず え
『東海道五十三駅 鉢山図会』(京三条大橋)

木村唐船作・歌川芳重画 嘉永元年(1848)刊
半紙本 2冊

素材となった歌川広重画、保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』の「京師」には、画面中央に三条大橋を横たえ、その後ろに町並み、背景に東山の山並みとその背後に比叡山を思わせる茶色い高山が描かれる。『鉢山図会』は浮世絵に忠実に、手前に三条大橋、その後ろに町並み、更に後方に高山が描かれている。町並みに描かれる複数の横線は、遠方風景の距離感を表す「すやり霞」という伝統的表現方法である。(山下則子)



山田 5



とうかいどう ごじゅうさんつき はちやまず え ちりふ
『東海道五十三駅 鉢山図会』(池鯉鮒)

木村唐船作・歌川芳重画 嘉永元年(1848)刊
半紙本 2冊

素材となった歌川広重画、保永堂版浮世絵『東海道五拾三次』の「池鯉鮒」(現在は知立と表記)は、『東海道名所図会』巻之三の挿絵に「池鯉鮒駅の馬市」として載る、初夏の馬市の情景を基にして、浮世絵では緑の色調の地平線を設けた原野と改め、談合松(馬の値段を決める場所)と群衆を奥の中央に据えた図とした。一方『鉢山図会』では、起伏のある地形の中に、柳が二本生え、馬三頭、馬方二人が描かれている。(山下則子)



山田 4



山田 9



やくしや み た て どうかいどう ごじゆさんつぎ
『役者見立 東海道五十三駅』
(程ヶ谷駅 ぬおかる)

三代目歌川豊国画
嘉永五年(1852)三月改印
大判錦絵(縦35.1cm横25.0cm) 1枚

天保四年(1833)三月上演歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』四段目裏初演の浄瑠璃道行『道行旅路の花婿』は、塩判判官が高師直に斬りつけた時に居合わせなかった、判官の近習早野勘平を、恋人の腰元お軽が、実家のある京山崎に連れて行く道中を舞踊化したもの。鎌倉から戸塚の山中を越えて行く。背景は帷子川にかかる橋で『江戸名所図会』所載の挿絵に類似する。お軽は歌舞伎役者、初代坂東しうかの似顔で描かれている。(山下則子)

山田 10



やくしや み た て どうかいどう ごじゆさんつぎ
『役者見立 東海道五十三駅』
(戸塚駅 早野勘平)

三代目歌川豊国画
嘉永五年(1852)三月改印
大判錦絵(縦35.1cm横24.9cm) 1枚

天保四年(1833)三月上演歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』四段目裏初演の浄瑠璃道行『道行旅路の花婿』は、鎌倉から京山崎に落ち行く途中の、戸塚の山中と設定されている。歌川広重画『東海道五拾三次』「戸塚」には休処が大きく描かれるが、本図では辺鄙な山野が背景となる。役者は八代目市川團十郎。保土ヶ谷駅の初代坂東しうかとはよく同座した。画題枠に鶯が描かれるのは、道行を邪魔しようとする鶯坂坂内を仄めかすか。(山下則子)

山田 11

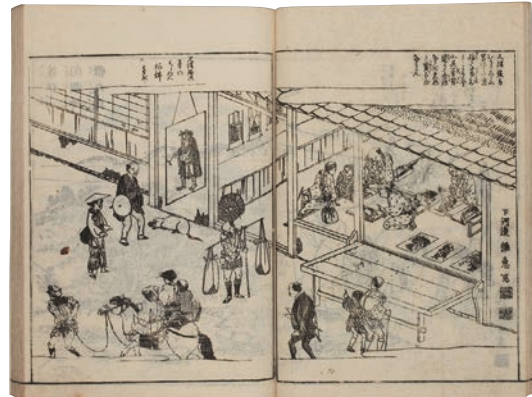


やくしや み た て どうかいどう ごじゆさんつぎ
『役者見立 東海道五十三駅』
(京二 真柴久吉)

三代目歌川豊国画
嘉永五年(1852)八月改印
大判錦絵(縦35.1cm横25.0cm) 1枚

『役者見立 東海道五十三駅』目次の京は五右衛門で、本作は其の二の久吉。安永七年(1778)初演歌舞伎『金門五三桐』に、京都南禅寺の山門に登った大盗賊の石川五右衛門が、桜満開の春景色を愛でていると、巡礼姿の久吉が山門の柱に「石川や〜」の歌を書き付け、五右衛門が投げた手裏剣を柄杓で受け止める場がある。背景は歌川広重画『東海道五拾三次』を利用し、「すやり霞」も描かれる。役者は三代目尾上菊五郎。(山下則子)

山田 12



『東海道名所図会』

秋里籬島作 竹原春泉斎他画
寛政9年(1797)刊
大本 6巻6冊

『都名所図会』(安永9年(1780)刊)以降、河内をのぞく畿内(山城、大和、和泉、摂津)の各名所図会を次々と手がけていった籬島が、はじめて東国を対象とし、かつ国単位ではなく海道に沿って執筆したもの。籬島は実地調査を行い、東海道に関する多くの先行書を博捜することにより、都を起点に東海道の名所をくまなく記した総合的な地誌として高い完成度を誇る。絵師は竹原春泉斎を筆頭に約三十名の布陣となっており、なみなみならぬ力の入った企画であったことが窺われ、実際、他の名所図会同様、好評を博したようである。(木越俊介)

役柄の人物が描かれる作品、特に何も記されず目次とは異なる役柄の人物が描かれる作品、「品川川崎間」のような間の宿シリーズなどがあり、正確にはつかみきれない。しかもそれがほぼ同年に改印を受けており、画工はもとより彫師や摺師もさぞ目まぐるしく働いたのだろうかと推測されるのである。

さて、中世から近世初期にかけて、高野山や河内の四天王寺などの信仰の中心地に繋がる街道を舞台とした語り物が多く生み出されたことは、阪口弘之氏のご研究(『古浄瑠璃・説経研究 近世初期芸能事情 街道の語り物』二〇二〇年刊)などで詳細に明らかになった。例えば高野山は「苜蓿道心」「滝口横笛」をめぐりなど、四天王寺は「しんとく丸」「さんせう太夫」などである。これは語り物を語りついで声聞師や芸能民が、聖地と街道要衝を結ぶようにして活動し、信仰の支持基盤を庶民層へと拡大していったこと

を表している。

それでは近世後期の『役者見立 東海道五十三駅』の爆発的流行は何を表しているのか。これは江戸を起点とする都市の庶民達が、信仰と観光を兼ねて東海道を頻繁に行き来し、日頃熱中している歌舞伎世界を、実際の東海道来敷衍してみたということであろう。

例えば品川宿は幡随院長兵衛(五代目松本幸四郎)、川崎宿は白井権八(五代目岩井半四郎)である。これらは安永八年(一七七九)森羅万象(森島中良)ら合作の浄瑠璃で、後に歌舞伎化された「驪山比翼塚」の人物である。両宿の中間にある鈴ヶ森で、追い剥ぎ達に囲まれて見事に斬り捨てた美しい若衆の権八と、江戸の侠客長兵衛が会って義兄弟になる場を踏まえている。目黒にある権八小紫の比翼塚にちなんだ話でもある。後世には川崎宿手前の多摩川下

流の六郷渡りで、権八が立腹を切る(立って切腹する)演出も生まれ、間の宿シリーズではそれが描かれる。

大磯宿は『曾我物語』に登場する大磯の虎(七代目岩井半四郎)、もう一つは虎の恋人である十郎祐成(十二代目市村羽左衛門)である。中世の『曾我物語』は、唱導家や虎などと名乗った比丘尼達による語り物から成立したかとされる。この凶の虎は、格式の高い傾城の髪型である伊達兵庫に、豪華な鼈甲の笄や挿し櫛をしている。十郎は、千鳥模様の肩当てをした橘模様の小袖、赤の下着が見える遊治郎である。苦心の末に父の敵討ちをした曾我兄弟の話は、御霊信仰と結びつき様々な歌舞伎に創作された。荒事として豪放に演じられた五郎とは反対に十郎は和事でも演じられた。それが反映した描かれ方と見えよう。

小田原宿は飯沼勝五郎(十一代目森田勘弥)、箱根

宿は初花(六代目岩井半四郎)、箱根宿其の二は下部筆助(四代目中村歌右衛門)である。これらはすべて『箱根靈驗覺仇討』の世界の人物で、十一段目の塔ノ沢の滝に打たれて、夫の脚を治そうと祈願する初花亡霊のけなげさが、ケレン的演出で表現される部分が見せ場であった。

『役者見立 東海道五十三駅』は、「東海道」が現代ではほとんど忘れ去られてしまった多くの歌舞伎・浄瑠璃や文学の舞台であり、幕末の庶民を熱狂させた世界を想起させるものであったことに気付かせてくれる。歌舞伎・浄瑠璃・文学による「東海道」の文化遺産化作品とも言えよう。

デジタル発和書の旅路

高羽 将人



Profile

高羽 将人 Takaba Masato

凸版印刷株式会社文化事業推進本部所属。凸版印刷に入社後、一貫して文化事業推進本部において、文化財をテーマとしたコンテンツ制作および活用の企画などにプロデューサーとして関わる。2018年からは、国文学研究資料館との共創プロジェクトを担当。

二〇一八年十月、国文学研究資料館(以下、国文研)と弊社による芸術共創プロジェクト開始の記者発表が行われた。このプロジェクトは、「日本文化の多様性や魅力をデジタルコンテンツで再創造し発信する」もので、国文研は所蔵の和書を中心とした資料及び研究成果を、弊社はデジタル化・コンテンツ化の知見を持ち寄ることで、共創を行うものである。この時、具体的活動の一つとして挙げられたのが、デジタルコンテンツを用いたイベントシリーズ「デジタル発和書の旅」の開催であった。おもに「ないじえる」の成果をその対象とし、シリーズ名は、和書のデジタルデータを活用することで、時代と空間を旅する、というコンセプトによって、名付けられた。

発足前のトライアルも含めて、私がプロデューサーとして関わった「旅」は、以下の通りである。

- ①二〇一八年三月九日「湯とアートが鳴子で出会う」(鳴子温泉早稲田栈敷湯)
『扇の草紙』・ 鍬形蕙斎『略画式』高精細アーカイブデータを使用
- ②二〇一八年六月二十三日「山村造」・ 蕙斎に逢いにゆく

(国文学研究資料館)

鍬形蕙斎『略画式』高精細アーカイブデータを使用

- ③二〇一八年十二月九日「ひるがえる和歌たち ― 扇と翻訳で古都に遊ぶ ―」(有斐斎弘道館)

『扇の草紙』高精細アーカイブデータを使用

- ④二〇一九年十月五日「古典籍×○○ラボ ― であう・うみだす・みとおす ―」(FabCafe Kyoto)

和書形態の時代別表示コンテンツ『和書ロード』を使用

- ⑤【番外】二〇二〇年三月二十五日「扇の草紙」翻訳コンテンツ「Found in Translation」完成披露会

『扇の草紙』翻訳コンテンツ「Found in Translation」制作

※「ロナの影響」により中止の「コンテンツ」の概要を紹介する動画を配信

イベントおよびコンテンツのプロデュースにあたり、私が常に心がけたことは、関連する資料のデジタル化が目的ではなく、デジタルはあくまで表現するための手法である、という点である。今、「旅路」を振り返ると、最も手法としてデジタルを活かすことができ、また評価を得たのは、④でお披

露目した『和書ロード』であったろう。和書の(卷子本や冊子本などの)形態、とその時代による変遷を同時に視覚的に表現するコンテンツである。実物の展示では、物理的に形態と年代を同時に表現することは難しいが、デジタルでは、その二つを縦軸・横軸にすることによって、表現することができた。

「旅」には、楽しさが必要だ。五回の「旅」を通じて、弊社が担うべきことは、「旅」の参加者に対して、研究成果と世間、過去と現在などを橋渡しする「旅」のコーディネートとして、楽しさを提供することにある、という点を改めて、実感した。共同プロジェクトの担当者として、「ないじえる」の関係者として旅の企画に関わることができたのは、大変光栄で、得難い経験であった。

「ないじえる」をきっかけに始まった「デジタル発」のこの旅も、with「ロナ」の時代においては、これまで以上にデジタルが寄与する部分が大きくなるはずであり、例えばオンライン開催を行うことで、より多くの方々に、和書の魅力を伝えていくことも可能である。そして私自身、これからの「デジタル発和書の旅」を楽しみにしている。